

# 「異文化」理解としての「会話」の授業

ブラハ・カレル大学 岩澤 和宏

## 0. はじめに

本稿では、ブラハ・カレル大学での実践を元に、「会話」の授業と「異文化」理解とについて考察する。

ブラハ・カレル大学日本学科のカリキュラムでは、「会話」は5年生の授業として位置づけられている。1年生からの「日本語」や「日本語練習」などの授業でも会話を授業の中心に据えてきた私にとって、また学生にとっても、あらためて「会話」という科目名の授業にはいつも戸惑いがある。「会話」の授業で何をするのかというコンセンサスが、大学側にも教師の側にもまた学生の側にも、およそ存在しないのである。

「会話」という言葉には色々な意味がある。2人以上が集まり、話を交わせればそれは「会話」と呼ばれるし、町中で道を尋ねるなど用を達するための言葉のやり取りも「会話」である。しかし、日本学専攻の学生が5年生の授業で行う「会話」は、単に用を達するためだけの「会話」や「おしゃべり」と同じであって良い筈はない。

そこで私は、この授業の中で言う「会話」を、ある程度の内容のある事柄について話たり聞いたりし、それに関しての意見や反論を述べたり質疑応答したりする行為ととらえることにした。話のテーマとしては学生の興味にそって、色々な意見が出やすそうなものを選ぶようにした。同時にそのテーマで「会話」することにより、学生にとって日本という「異文化」を理解するのに役立つよう配慮した。

## 1. 「会話」の授業について

### 1.1 授業の概要

対象者：ブラハ・カレル大学 日本学専攻 5年 18名

期間：1994年10月～1995年5月

時間数：週1回 90分 26週

### 1.2 「会話」のテーマ

地域と外国人	……日本における外国人の問題に関して
「侵略戦争」	……歴史認識、近代文明、靖国公式参拝、御霊信仰について
夫婦別姓問題	……民法改正案、嫁姑問題、主婦の役割等に関して
テレビの暴力	……テレビの影響と暴力シーン規制の是非について
「わいせつ」基準	……加納氏の逮捕に関連し、「わいせつ」とは何かについて
日本における差別	……被差別部落民、アイヌ民族、日雇い労働者等の問題について
ジプシーに対する差別	……差別意識や報道のあり方をめぐって
「クトナーホラー法令」	……学問・文化・政治のあり方やドイツ人差別に関連して
ローマ法王の回章	……人工妊娠中絶、人工受精、安楽死などをめぐって
捕鯨の賛否	……捕鯨の賛否、捕鯨の規制、IWCの動きなどについて

オウム真理教とサリン事件……事件の途中経過と「宗教」について

### 1.3 授業の進め方

授業に先立ち、学生との話し合いによりテーマを決める。上記のテーマの大半は学生が提案したもの。教師が提案した場合でも、学生が賛成したもの。

そのテーマを話し合うのに必要と思われる語彙をリストアップし、学生に配る。意味を調べるのは通常宿題だが、必要によっては教室で説明する。

決められたテーマについて学生または教師が報告し意見を述べる。それに対して他の学生が質問・反論・批判をしたり意見を述べたりする。

ひとつのテーマにつき、2～3週間かける。次のテーマに移るまで、学生は自宅や寮で意見をまとめたり、資料を搜したりという時間がある。

特に学生をそう仕向けた訳ではないのだが、多くの場合「会話」と言うより討論・議論に近い形になった。

## 2. 「異文化」理解について

### 2.1 「異文化」理解の必要性

日本語の教師は、日本語を教えることを通して同時に日本文化も教えるべきだと私は考えている。それは、意図的に日本文化を教授しようとして、それを授業の中心に据えて行う場合もあるだろうし、そうではなく、日本語の構造や授業の進め方そのものが、或は教師のちょっとした表情や身ぶりまでもが日本文化の一部として、教師の意図しないままに学生に伝わることもあろうかと思う。

ヨーロッパ、殊にブラハで「日本文化」と言えば、まず真っ先に歌舞伎や茶道・華道それに日本の武道などが想起されることが多いようである。これらも大切な日本文化には違いないが、日本語教育の専門家がこれらすべてのことに通じていることは不可能であるし、また学生の側でも皆が皆それらに興味を示す訳ではない。

日本語教師が日本語教育を通して伝えることができる日本文化、日本語教育を進める上で伝えておかなければいけない日本文化、或は実際問題としてすぐに伝えることができる日本文化とは、今現在の日本の問題や日本人の生活、現在の日本人のものの考え方などであろう。

ブラハに限って言えば、89年ピロード革命直後の頃は、一般の人々にとって日本はまだまだ遠い国であり、日本に関する情報も少なかったようだ。95年の現在では、街で日本車を見ることも珍しくなくなり、日本製の電化製品もかなり普及してきた。それと共に一般の人々も日本についての某かの知識を持つようになった。それ自体は良いことなのだが、同時に正確ではない知識、アメリカ経由かとも思われる浅薄でステレオタイプの日本認識も多く耳にするようになった。当然、それは学生の日本認識にも少なからず影響を与えていて、日本学科の学生でさえもが日本についてとんでもない誤解をしていることもある。

日本語の文法も歌舞伎もよく知っているが、現在の日本についてはあまりよく知らず、またとんでもない誤解をしているというのでは、日本学専攻の学生としては落第であろう。「会話」の授業を通して「異文化」理解を図ろうというのは、そのような背景からであった。

## 2.2 「異文化」の理解と学生達の反応

「異文化」の理解のために「会話」のテーマとしたものは、1.2 で挙げた通りである。「侵略戦争」問題や夫婦別姓問題、差別問題、捕鯨やオウム真理教など時事問題が多く、これらを「文化」と呼ぶべきかどうかについて、疑問はある。しかし、どれも今日の日本や日本人を理解する上で重要なテーマである事は確かである。そして、それらの問題について日本人はどんな意見を持ち、どう考え、どう対処するのか。これは間違いなく日本人の文化の一部であり、これを知ることは学生の日本理解に有益であろうと思われる。

具体的にいくつかを紹介すると、「侵略戦争」問題では、閣僚の問題発言や御霊信仰、賠償問題などを説明し、それらに対するいくつかの日本人の意見を紹介した。チェコやスロバキアはナチスドイツとの関係で、第2次世界大戦を日本とは違った側面から見ており、謝罪や賠償問題についての考え方も日本人とは視点を異にする。視点が違う事を確認するだけでも有益な事だと思われるが、何故そうなのかということ掘り下げて考えていく中で、それぞれの文化の一端が見えてきたと思う。

文化の一端が見えるという意味では、夫婦別姓問題はその典型だろう。現在の日本の民法では夫婦の別姓は認められておらず、現在認める方向に動いていることは今日の日本文化の一端と言えるだろう。そして、それに対するチェコ人・スロバキア人の非常に冷静で、ある面冷ややかな視点もチェコやスロバキアの文化と言えるかも知れない。

「捕鯨」を巡っては、日本の文化の紹介なしでは語れない。鯨の利用方法は日本文化と深く関わっている。その賛否については、現在のIWC内でも文化と文化のぶつかり合いという面があるが、それに近い事は教室内でも起こった。ただ、捕鯨に肯定的な資料を多く集め過ぎたせいか、全面的に捕鯨に反対する意見は出ず、IWCのような非民主的な事態は避けることが出来た。

ただ、捕鯨に必ずしも肯定的な意見を持っていない学生が、反対意見を述べるのに少し遠慮があったかもしれない。捕鯨の国から来た教師を前に堂々と反対論を展開するにはそれ相当の根拠と勇気がある。勇気の方はともかく、我々はその方面の専門家ではないのだから、賛成にせよ反対にせよ充分科学的な根拠は示し得ない。それぞれの側が主観的に資料を引いて主観的に論じあうという、「討論」としては中途半端なものだったかもしれない。

「差別問題」について多くの時間を割いたのは、学生の希望でもあり、また教師の意図するところでもあった。日本で差別された経験を持つ学生もいるし、ヨーロッパでの排外主義運動には学生・教師とも無関心ではいられない。学生・教師とも自らの体験を交えて話す事ができるし、またジプシー差別などには皆それぞれ自分の意見を持っている。限られた時間内で日本における差別問題がきちんと理解されたかどうかは疑問が残るが、差別そのものの根源は日本もチェコも同じであろう。「差別はいけない」という安易な結論に満足することなく、自分は差別されながらも差別する側の一翼を担っているという認識に達した辺りで幕引となった。

人工妊娠中絶の是非を巡っては、学生間で意見が分かれた。このテーマでは、教師である私が、キリスト教を背景に持ちながら常に現実的な判断をして来たチェコ人の考え方を教わる方が多かったように思う。直接に日本文化と関係のあるテーマではなかったこともあり、「異文化」理解としては私が知る限りでの日本の状況や優生保護法を簡単に紹介す

るにとどまった。

### 2.3 学生による教師の「教育」と自国の文化理解

教師の仕事は学生を教育することであるが、教師はまた学生によって磨かれる。それは、教授項目に対する学生の理解が不十分なのは、教授法に問題があったからだと気付かされることもそうであるし、また文字通り学生に教えられることもある。殊に、「異文化」理解に関するかぎり、教師は学生に教わることが多い。

日本語教師は、日本文化に関しては学生よりもよく知っているという前提で授業を進めているのだが、他方、学生達の文化、ブラハでの授業で言えばチェコの文化に関しては教室内で一番無知な人間であることは、誰もが承知していることである。

日本文化を教えようとする際、日本文化だけしか知らないのでは危険な面がある。何が日本独特で何がそうでないのかについて、何を問題にするべきで何がその必要のないことなのかについて、適格な判断ができない可能性が高い。とするなら、日本文化を教えようとするものは世界の文化に通じていなければならないことになるが、実際にはそれは不可能である。しかし、少なくとも学習者の文化については、ある程度理解しておかなければならないことは言うまでもない。

チェコ人・スロバキア人学生に日本文化を理解させようとしながら、逆に日本人である私がチェコ文化・スロバキア文化について教わることは多々ある。勿論、それが授業の目的ではないのだが、学生は日本人である私に対して自分たちの文化を説明しようとする中で、チェコやスロバキアの文化を再認識することも多かったと思う。他人に説明するには、自分がその内容を熟知し、客観的に見ることができなければならない。

実は、教師である私にチェコやスロバキアの文化を説明しようとする学生達の間でも、共通の認識があった訳ではない。時にはそれを巡って議論も起こった。学生達は日本文化との違いを考える中でチェコやスロバキアの文化を捉え直したのである。

まさに「教えることは教わること」である。「異文化」理解とは、学生・教師双方の日本文化理解、チェコ文化・スロバキア文化理解と捉えるべきであろう。「国際化」と言われるものがお互いの文化の相互理解の上に発展していくとするならば、チェコ人・スロバキア人・日本人が、相手国の文化を理解しようとする以前に自国の文化について正しく認識していることが前提となるであろう。

なお、「会話」の練習という観点から見ると、自分の文化を説明しようとする際に、学生達は最も強い「会話」のモチベーションを持つようである。

## 3. 問題点と今後の課題

授業の効果を数値で表すことはできない。しかし、授業を通して今日の日本が抱える問題に触れることができたことは確実だし、学生の側だけではなく教師も「異文化」により深く触れることができた。

以下に授業の問題点と今後の課題を記す。

### 3.1 「異文化」理解と「会話」の練習

「異文化」理解と「会話」の練習とどちらに主眼があるのか。このふたつが同時に進行する事を理想としたが、実際には時には「異文化」理解を、時には「会話」の練習を重視し、結果として双方とも中途半端になってしまった感は否めない。

「異文化」理解としては、例えば日本文化の負の面として「いじめを苦にした自殺」などを取り挙げたいと思ったが、学生の興味・関心、話しやすさを重視した結果、このテーマは見送られる事になった。日本では大きなニュースとなったこのテーマを教室で提案した際、学生は誰も特に関心を示さなかったのだ。勿論いじめはチェコにもあるのだが、それを苦にした自殺は恐らくチェコ人の理解の範囲を超えており、学生はこのテーマで話し合う事はむずかしいと感じたに違いない。

また、「会話」の練習という観点から見れば、自分の意見をあまり表明しない学生や「討論」について来られない学生を置き去りにしてしまう傾向があったことも、反省点として素直に認めなければならない。出来るだけ全員に発言の機会が廻るように配慮したつもりで、学生の側もそういう教師の意図を理解していたこととは思うが、議論が白熱してくると、何も言わない学生を無視して議論を進めてしまうことが、教師の側にも学生の側にもあった。議論の半ばでおとなしい学生に発言を求めると、全般的な外れな意見で議論に水をさすようなことがしばしばあり、それが一層口数の少ない学生を無視してしまう傾向を促進したということもある。

ひとつの授業の中で「異文化」理解と「会話」の練習を意図するならば、場面場面でもちを重視するのかを教師は明確に捉え、それを学生側にもよく分からせた上で授業を進めなければならないと感じている。

### 3.2 「会話」の練習と間違いの訂正

学生が話す日本語には、常にいくつかの間違いがある。それでも意味が通じる場合もあるし、そうでない場合もある。意味が通じなければその場で訂正するより他ないが、充分意味が通じるような小さな間違いについては、いつどこで訂正すれば良いのかが問題となる。

特に「会話」の練習の最中や議論が白熱してきた段階で、いちいち間違いを訂正していたのでは、議論の流れを止めてしまうことになるし、また学生の発言意欲を削いでしまうことにもなる。今回の授業の中では、「会話」の最中や討論の中では、明らかに意味が取りにくい場合は別として、小さな間違いは無視することとして授業を進めた。正しい日本語よりも「会話」や議論・討論の流れを重視したのである。

しかし、間違いはいつかは訂正しなければならない。本来ならば、授業中の学生の間違いをメモしておいて、授業の終わりにでも注意を促す作業をまめにしなければならないところである。しかし、時間の制限もあり、また教師も討論に積極的に参加していたこともあって、その作業は不十分であった。

「会話」をテープに取っておいて後でまとめて訂正するという方法も考えられるが、その手順の煩雑さや労力の限界もあり、比較的少ない労力でより効果的な方法を考え出さねばならないと感じている。

### 3.3 話しにくいテーマについて

日本語教育では「政治」や「宗教」の話題は扱いにくく、出来れば避けた方がよいとされている。しかし、「政治」も「宗教」も今日の日本社会や世界を理解する上で避けて通る訳にはいかない問題である。今回の授業では学生の希望もあり、敢えてこのテーマを避けることはしなかった。

「政治」「宗教」、それに「性」の問題は、学生の間でもいづらか話しにくいテーマで

あったようである。少なくとも話しくいと感じた学生がいたことは事実である。そういう学生に発言を強制することはしなかったが、それは結果として「会話」や議論・討論から置き去りにしてしまったという面があった。

例えば、人工妊娠中絶の是非について話し合っていた時、ある学生は宗教的信条から全面禁止するべきだという立場に立った。これに対してある女子学生は、「じゃ、子供が欲しくない人はセックスをしてはいけないということですか。」と発言し、議論は大いに盛り上がった。しかし、同時に、思うところがありそうな顔をしながらも何も言わない学生もいた。私は、宗教的立場を公表する学生にも、またそれに対して素直な疑問をぶつける女子学生にも敬服する次第であるが、自分の立場や意見を表明したくない学生の気持ちも良く分かるし、それは無理もないことであろうと思う。

「政治」については、チェコやスロバキアの暗い部分をそれ程突っ込んだ訳ではないので良く分からないが、学生の幾人かには公にしたい部分があったとしても不思議ではない。

いずれのテーマにせよ、自分の立場や意見を公表することに何も問題を感じない学生にとっては意義のある「会話」や討論であっても、そうでない学生にとってはある面苦痛だったかも知れない。

デリケートな問題を扱う際には、その点の注意が充分必要であろう。

#### 3.4 「会話」の練習中でのチェコ語・スロバキア語の使用について

日本語の「会話」の練習をしているのだから、授業は当然日本語で行うべきことは確かである。それは、教師のチェコ語の能力が学生の日本語に比べて遥かに劣っていることと無関係ではないのだが、それは日本語を使用すべき第一の理由ではない。しかし、ではチェコ語・スロバキア語の使用を全く禁止するべきかと言うと、必ずしもそうとも言えない面がある。

学生同士は、普段は当然チェコ語やスロバキア語で話している。「会話」の授業という人為的に作られた場面では、教師と学生との間は勿論、学生同士でも日本語で話すことが要求されている。これは、一種の「演技」をやっているようなものである。日本人の教師の前で、普段チェコ語やスロバキア語で話している者同士が日本語で話すという「演技」にすぐに慣れ、それが自然に出来るようになる学生もいれば、そうでない学生もいる。

問題は、その「演技」の中できちんと自分の意見や立場が表明出来るかどうかということにある。それは日本語の「会話」能力だけの問題ではない。授業が始まる直前までチェコ語なりスロバキア語なりで話していた相手に、今度は日本語で自説を説くという奇妙な状況を我慢出来るかどうかという問題でもある。結局は我慢してもらわなければ仕方がないのだが、その我慢の限度にも個人差があり、時には討論の途中からチェコ語やスロバキア語に換ってしまうこともしばしばあった。

勿論、チェコ語やスロバキア語の討論が延々続いては困るので、適当なところで日本語に切り替えるよう指示するのだが、そのチェコ語なりスロバキア語の討論は、「演技」を一時休憩する余裕を与えたり、また日本語での討論の流れを確認するためのものとして、全く無意味ではなかったと思う。

ではどこまでチェコ語・スロバキア語の使用を認めるのか。これは、3.1 で述べたように、「異文化」理解と「会話」の練習とどちらに主眼があるのかという問題と関わってく

る。「会話」の練習に主眼がある場合には、当然チェコ語・スロバキア語の使用は厳しく制限されなければならないし、「異文化」理解に主眼がある場合には、多少大目に見てやる必要があるかもしれない。

チェコ語やスロバキア語で議論が白熱している時には、教師は全く蚊帳の外で教師の役目は皆無に近いのだが、一旦場を区切り、それまでのチェコ語・スロバキア語の議論を日本語に要約させることで、そのチェコ語・スロバキア語での議論も授業での意味を持つことになるだろう。

#### 4. おわりに

今回の授業を通して分かったことのひとつは、ブラハの大学で学ぶ学生、特にチェコ人の学生は議論や討論が大好きだということである。そして、単に好きだというだけではなく、議論・討論の仕方が上手である。

私は常々、日本語を学んでいるからといって日本人と同じようになる必要はないと学生に説いているのだが、議論下手と言われる日本人の議論の方法をまねる必要は全くないと感じている。

ならば、我々のやってきた「会話」は非日本的だったのだろうか。

昨今、日本人の議論下手が指摘され、中学・高校などでディベートを取り入れた国語教育をしているところもあると聞く。これにより日本人の話し方が変わるのか、しかも良い方に変わるのかという疑問はさておき、日本人の話し方を変えようとする動きがあることは確かである。その際、日本人とは異なる文化的背景を持った外国人の話す日本語が日本人に影響を与えないとも限らない。

外国語を学ぶということは、その言葉を生んだ国の文化を理解すると共に、またその国に何らかの影響を与えることをも含んだ知的作業であると思う。大学での「会話」の授業が、単にすぐに役立つ実用的な「会話」、日本人の話し方をまねるだけの「会話」のトレーニングだけで終わってしまうなら、それは何とも薄っぺらくて味気ないものになってしまうのではないだろうか。